

1. 概要

【主担当部局】福井県教育委員会高校教育課 （公立特別支援学校担当）	【主な関係部局】福井県教育委員会義務課 （公立小学校担当） 福井市教育委員会学校教育課 越前町教育委員会学校教育課	【自治体 本事業関連URL】 https://www.shimizu-sh.ed.jp/ https://www.town-echizen.ed.jp/~asahi-el/contact2.html
--------------------------------------	--	--

本事業の 目的	【当該地域におけるこれまでの課題】 ・交流及び共同学習の実施は継続してものの年間1～2回のイベント的な交流がほとんどである ・特別支援学校の児童生徒にとっては「楽しかった」という感想のみに留まっている ・小・中学校の児童生徒においても特別支援学校の児童生徒と接する時間が限られているため、主体的で対話的な学びの実現には至りにくい
	【本事業を通して達成を目指す目標】 ・県内の学校における障がい理解が深まり、インクルーシブ教育システムの推進及び充実につなげていく ・障がいのある児童生徒の学びの連続性を高め、各学校の柔軟な教育課程の編成や指導体制、校内体制づくりの構築を目指す

学校運営 連携校	特別支援学校	小・中・高等学校
	福井県立清水特別支援学校 （児童生徒数）小：16名、中：2名、高等部：6名 （障害種）知的障がい	越前町立朝日小学校 福井市清水中学校 （児童数）364名 （生徒数）234名

カリキュラム・ マネージャー	【配置人数】 1名	【主な経歴】 特別支援学校長、福井県特別支援教育センター指導主事
	【本事業における役割】 ・交流及び共同学習の連絡・調整 ・学校間の教育課程をコーディネート ・授業後や担当者会・連携協議会での指導・助言	

連携協議会	【構成人数】 12名	【開催回数】 3回	【外部専門家】 美術専門家1名、公民館長1名、保護者1名
	【連携協議会において検討・議論した主な内容】 ・子どもたち同士の関わり方や変容 ・学習内容や教材の提示の仕方など ・地域から見る子どもたちの学び		

2. 交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

交流及び共同学習の発展の方向性・ねらい

- ・学校間において教科の指導内容等のすり合わせを行い、教育課程の柔軟な編成を検討し、連続した学びを保障する
- ・活動を共にするだけでなく、障がいのない児童たちが障がいのある児童たちに対してどのような声掛けや提示の仕方等をすれば伝わるのか、また楽しめるのかを主体的に児童たちが考え授業づくりに参画していくこと

実施内容

①		②	
対象学年：	清水特別支援学校小学部5年と朝日小学校5年	対象学年：	清水特別支援学校小学部4年と朝日小学校4年
回数・教科：	計9回：音楽2回、体育2回、図工1回、 特別活動3回（総合）、生活1回（家庭） （ ）は小学校の教科等	回数・教科：	計8回：音楽3回、体育2回、特別活動2回（総合）、 その他1回 （ ）は小学校の教科等
主な内容：	音楽：打楽器を使った活動 体育：高跳び 図工：絵の具を使って	主な内容：	音楽：手話を交えた歌唱 体育：キックベース

指導内容・指導方法の工夫

- 特別支援学校で使用している教材・教具の活用や環境の設定を取り入れる
- ・音楽で、電子黒板に歌詞や活動の流れを映し、どの児童にとっても視覚的に分かりやすく提示。
- ・特別支援学校の児童に馴染みのある曲を用いて、簡単な手話も導入。
- ・身近な生活用品を使用して作成した筆を使用し、表現の幅の拡大。
- ・グループ活動を取り入れ、少人数で関わる時間を設定。



交流及び共同学習の成果

- 児童の変容
- ・小学校のMTの一斉指導の声掛けのみでトライアングルのリズム打ちができるようになった。
- ・簡単な手話を使って、特別支援学校の児童への働き掛けが見られた。
- ・特別支援学校の教材を共有したことにより、小学校児童の活動の幅が拡大した。
- 両校でのMTとSTの連携
- ・STが関わりのロールモデルとなり小学校児童が声掛けなど工夫するようになった。



2. 交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

交流及び共同学習の発展の方向性・ねらい

- ・ 特別支援学校と中学校生徒が協働で作品を制作し、地域での展示会を企画運営するなど、地域に発信する教育を展開
- ・ 特別支援学校の生徒からも感性を学び合うことでの障がい理解の推進

実施内容

①		②	
対象学年：	清水特別支援学校中学部と清水中学校美術部	対象学年：	
回数・教科：	計2回：美術2回	回数・教科：	
主な内容：	美術：粘土を使った作品作り	主な内容：	

指導内容・指導方法の工夫

○題材や環境の工夫

- ・ 新しい環境での活動に不安を感じる生徒に配慮し、取り組みやすい題材を用意するだけでなく、いろいろな人との関わり方や、粘土の造形活動がスムーズにいく支援の仕方等を検討。
- ・ 初めての活動場所で、教材教具の置き場所がわかりやすいように配置。

○出前授業

- ・ 中学校の生徒や教員に特別支援学校の生徒の表現の仕方について説明。



交流及び共同学習の成果

○生徒の変容

- ・ コミュニケーションを苦手とする生徒が集団活動参加することができた。
- ・ 中学校の生徒が事前に相手校の生徒について知り、自然な関わり方をしたことで、特別支援学校の生徒が落ち着いて活動に取り組めた。

3. 現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

教員や専門スタッフの配置等の工夫

- ・両校の教員によるチーム・ティーチングで行ったことで、小学校の児童は特別支援学校の児童に対して、どのような声掛けや支援をするとよいかの見本となった。特別支援学校の児童は、音楽の専門の先生から指導を受け、楽器の扱いなど習得できるようになった。
- ・両校の教員がそれぞれの学校の特長を把握したうえで授業を考えられた。

学校運営連携校間の一体的で専門性を生かした指導体制の構築

- ・カリキュラム・マネージャーが授業を参観、助言を両校で共有。
- ・交流及び共同学習後にMT、STの連携等について助言。
- ・次の交流及び共同学習に向けて打ち合わせシートや評価シートを両校で共有。学校運営連携校間での共通理解を図る。

各学校運営連携校における校内体制の構築

○特別支援学校

- ・校内インクルーシブ教育委員会の立ち上げ、担当者以外の教員に対しても情報共有を推進。

○小中学校

- ・事業開始前にインクルーシブ教育についての研修（障がいについての理解促進）。
- ・校内での運営の仕方や組織内での位置づけの検討。

教員研修の実施

○特別支援学校

- ・校内研究テーマに位置づけ。研究会では大学教授からの助言をもらい、授業づくりについて指導を受け、交流に反映。

○小学校

- ・校内教職員向けに学校長よりインクルーシブ教育についての研修の実施。特別支援学校を訪問し行った交流の報告や障がいのある子とない子が一緒に学び、多様性を認めあたたかくつながり合う大切さについて共有。



4. 課題と展望

令和6年度事業における課題

【交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討】

- ・事業開始1年目ということで、どの教科で交流及び共同学習で実施していけるかを両校で決めていくことが難しかった（教科の統一）。
- ・活動ありきにならないための指導目標や体制づくりのすり合わせに時間を要した。

【現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方】

○交流及び共同学習における両校の担任の役割やあり方について

- ・校内に位置付けている交流コーディネーターや特別支援教育コーディネーターとの役割分担。

令和7年度事業の展望

【交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討】

- ・合理的配慮を取り入れたわかりやすい授業づくりに取り組む。
- ・学習の習熟度に差が見られる両校の児童が、共に学ぶための適切な指導目標の設定について追求していく。
- ・特別支援学校の教員が小学校でMTをつとめる等、所属校にこだわらずに授業を実施。

【現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方】

- ・それぞれの学校の交流コーディネーターや特別支援教育コーディネーターが両校をつなぐパイプ役となり更なる授業改善に取り組む。
- ・地域の資源を含めた外部専門家の活用を促進し、専門性を高めた授業づくりに取り組む。